

# 板書画像と録音ファイルの活用による復習促進策と ノート作成力の向上策の試み

## One practical method of training the abilities of taking notes with sharing the recorded sound file and picture file of the lecture for the students

講義授業におけるノートを取るという作業は、受講生にとって試験対策などのために不可欠な作業と思われるが、講義の聴講に集中する上では妨げになることもある。ノート取りを、重要な情報の取捨選択と整理という、将来論文やレポートを始め、リサーチ全般の実践において有効な情報収集及び整理につながる訓練として位置づけ、そのための具体的な手法を実践事例として提案する。

キーワード : ノート取り、FD、授業改善、リサーチ手法、ICT活用

小笠原 宏\*

Hiroshi Ogasawara

### I. 本論文の目的とその背景<sup>1)</sup>

複数の要因から始めた授業ログの公開手法が、さらに進化及び新たな目的も兼ねた試行錯誤含めた多様な試みを経て、今回のノート作成力向上のための手法の提案に繋がったといえる。それらの要因の中には、教える側の教育手法の開発及び試行という要素も入っている。何が「良い」のかという基準や尺度に関する論議はさておき、「より良い授業」を実践するために繰り返されてきている、いわゆるFD活動の一環としても考察を重ねてきたことによる、一つの具体的な提案でもある。

今回の提案手法は遡れば当初は、良い講義をするために、何が教える側、学ぶ側双方に必要であるかという視点からの考察であった。学部授業では通常4単位を学生に認定するのに30コマ(1コマ90分)の標準的な講義時間が設定されている。その中で、学生の個々の授業及び、講義課程全般に対する集中力と学習意欲をいかに持続させるか、あるいは向上させるかは常に検討されるべき課題であり、目標である。通常の講義型の授業においては、聞き流すだけでなく、「ノートを取る」という作業は期末試験、レポート対策などのために、従来から当たり前の作業として行われてきた。講義内容が、そのまま或いは変形して試験で問われるような場合には、いかに講義に集中し、ノートを取るかというのは大いに重要なポイントであった。筆者が現役の大

---

\* 流通科学大学 商学部, 〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

学学部生のころも、必死にノートを取った記憶がある。しかしここ数年、ノートを取らない学生が増えている。

ノートを取る、あるいは作成するという作業は、授業で試験対策に行うためだけでなく、通常の学習や卒論などの論文作成の際のリサーチ作業においても重要な作業である。文献や、論文等々の参考資料を読み込むことにより、情報を得るために、重要なことから、論文執筆に参考になる事柄などをノートなりメモの形にまとめていく作業は必須であろう。この作業は、レポートの作成に関しても同様に必要な作業である。卒論の執筆に際して、まず学生と接して指導しなければならないのは、こうした文献、資料類のリストを作成することであり、次にそれらにあたらせながら、ノートやメモを作らせていき、途中経過などの報告の際に、レジュメと称する要録にまとめて指導教員たる当方に向けて発表、そして論点を提示しながら他の学生も交えての議論、討論などといったいわゆる演習指導を行って通常は進めていく。多くの場合、こういった論文を執筆するための必要作業は、レポート作成と大きく異なり、自らの見解や意見などの部分を練り上げるために必要な作業である。先行研究を取り上げて文献や資料を読破して理解することも、また必要な作業であるわけだが、そういった際には、必ずノートあるいはメモの作成が必要になってくる。後々参照したりする場合には、重要な資料となるからである。

こういった作業は、論文がなんたるかを理解するのと合わせて、初学者には非常に煩雑な作業に見えるのはいたしかたないが、この関門をくぐり、論文作成まで至る道をたどることが、演習終了のための要件であり、またその成果であるということ認識させなければならないのが本来の姿であろう。しかし昨今は、卒業論文なるものが卒業のための必須要件ではないことが多いので、当然ながら論文作成に対して必須な、こういった作業および訓練を忌避したり、途中で放棄したりする学生が多い。安易に、インターネットの普及により、剽窃あるいはそれに限りなく近い恐れのあるような行為が、カット・アンド・ペイスト（切り貼り）作業で容易に行われるのは、こういった作業や訓練の目的が明確に認識されていないこともあるし、煩雑な作業を地道に行うという気風自体が衰退あるいは欠如しているという事情もあるのだろう。文献資料などを検討する作業は、はじめてみると関連情報がどんどん広がり、終わりがなく、まさに発散してしまいそのような感覚におそわれることもある。その結果、論文が最終的に完成できないのではないかと不安になることも珍しくない。この感覚やおそれは非常に重要で、初学者に限らず大量に存在する資料などがある場合、どこまで、どの程度まで検討すればいいのか、しなければならないのか、という大なる疑問と無力感に直面することにより、現実問題として、その線引きや区切りを自らがどう付けるかの訓練の機会となる。限られた情報と時間の中で、言えること、言えないことといった論理を組み立てて論文を作成することが求められるからである。最終的に論文が時間切れなどで、独自見解の構築までにはいたらなかったとしても、この資料や文献を検討して、ノートを作成するという作業は今後の問題解決のための一つの大きな基本的アプローチをとにかく経験し

たという意味において大いに意義があるはずである。まず何らかの問題に直面したときに、それをどのように解決あるいは乗り越えるかという場面において、まずどのように立ち向かうべきかを当人に思い起こさせてくれるということである。

## II. ノート取り作業の意義と目的

ノート取りは、第一にこれは試験対策が大きな目的として、授業内容の整理及び科目自体の中身をまとめるのに必要「だから」行う作業といえる。だが同時に、授業内容に対するメモ、備忘録であり、後々のための資料でもある。期末試験などにおいては、持ち込み資料として使われるし、持ち込み不可の場合は、復習の材料となる。出欠頻度重視の方向から、授業には出席するが、ただ漫然と授業を聞いているだけの学生が増えてしまっている。居眠りや携帯電話などいわゆる「内職」をするなど、ただ出席すれば良いという態度の学生も少なくない。試験対策には、資料を整理している学生のコピーなどを集めて対応するのが常態化しており、これは今でも昔でも大差ない。最近ではネットにおける交流にしても、相互扶助などの名目で友人関係も軽いものが当たり前となり、容易にノートや試験情報も全てが正しいものでないが手に入れられやすくなっているという状況もある。筆者が学生の頃には、大学近くの店舗などで、有料で授業ノートの販売をする輩まで登場していた。

伝えるべき情報や知識の量は基本を含めて増大し、また事例紹介にしても限られた時間での情報伝達量は多いので、結果的に筆者は担当授業の多くで講義形式を採用している。学生の受講意識に勉強意欲の乏しいものには聞き流しになってしまう状況でもあった。また、学習意欲の低いものと高いものが混在する極めて好ましくない状況が発生しているのも事実である。日本の学部教育のレベルや到達度が低下している理由は、簡潔に言えば、授業運営形式において、例えば、シラバス整備などは進みながら、実態として予習、復習を基本的に行わなくてもこなせる授業形態が多いことに一因があるともいえるのは事実である。もちろん、では何らかの基準を設けて、それに従った能力別のようなクラス編成にしたとしても、学生自体の学習意欲という尺度で測られなければ、クラス分けをする意味もあまりないし、この意欲の程度を計測するのは非常に難しく万全策はないと考えられる。つまり、混在するなかで、意欲が高い学生の満足度に着目しその充足を目的とするような講義運営を行うということが一つの対応策であると考えられるということである。基本知識や思考アプローチの理解がないところでいくら自らの思考や問題意識の醸成を促しても、殆ど生産的な質疑や討議はできない場合が多い。稚拙なレベルでの議論に終始してしまう例が多い。そういったところの効率的な、予習や復習といったところで特にふり返りの部分の補助作業として授業の記録として以上の学生自身による自分のための有効なノート作りとは何かを考え、提案し、実践させる手法の一つの方法をここでは取り上げる<sup>2)</sup>。

もちろん講義そのものが、飽きさせない授業であることも一つであり、それは努力目標でもあ

る。しかし面白い授業、楽しい授業という評価軸と、ためになる、学べる授業とは評価軸は異なると理解することも重要である。このあたり混同している向きも依然多いように思える。それでも、講義する側は、様々な手法を試行しながら、マンネリ型の講義にならないようにし、学生の好奇心及び学習意欲を高め、出席意欲も維持させることが求められる。授業計画、シラバスなどを含め、教員側が創意工夫をこらすのに加えて、受講する学生側の視点からの利便性や環境改善、動機付けになるような方策としても授業ログファイル（音声及び板書撮影ファイル）は、非常に活用できるコンテンツ、教育資産であると言える。筆者は連続した講義の仕組みとの一つとして、予習、復習という部分をより積極的に取り入れるべく、学生のノート取りという作業に着目している。その作業の意義及び教育効果を考え直し、より学習効果を高めるよう努力している。ここで取り上げた方式を、筆者は担当する講義型の授業において全て実施しているが、現場での学生たちからの要望を聞くたびに、他の科目でも、同様にして欲しいという意見が出てくる。以前（2012年私情教ICT大会）で、筆者はこの方式を、授業公開という視点からの活用可能性について発表を行ったが、その後継続して実施している過程において、学習訓練機会としても活用できるということが明らかになってきたので、ノート取りという視点から新たな視点からの提案として新たに上げた次第である。

この方式は、教育改善の目的・目標の達成のための手法として、講師側へのメリットもある。単純に言えば、作業量が増えて負荷が増す（面倒、煩雑になる）ともいえるが、いずれも慣れてしまえばたいした作業量ではない。それよりも、新しいニュースや、事例を最大限取り入れて、興味を持たせるために、授業の中身の入れ替えなどにおいて「機動性」と「柔軟性」を維持することができ、非常に授業準備及び運営において活性化させられる。もちろんそれは教員には非常に負荷がかかる場合も多いのは事実である。だが、ICTを援用することにより、多少負荷が軽減できるということよりも、可能性が広がるということこそが重要なポイントであるように思えるので、忌避するよりも期待して試行してみるべき方策であると考える。

つまり、テキストに書いてあるようなことは、講義外で学生が自習可能なわけでもある。自習を促せば良い。講義内容はむしろ、講義でしか、あるいは講義だから聞ける内容を取り上げるのが筆者の基本的考え方としている。そのことを達成し、授業のライブ感を最大限発揮することが、学生の興味と緊張感を維持するのに大いに効果がある。学生には意外性や驚き、気づきを求め、自分の意見、考え方を実践することを求めている。もちろん講義の中での質問及び発表、レポートなどを適宜課すことも当然一つの方法として可能である。だが既存の方法だけでなく常に新しい手法や仕組みを試行してみるということは必要なはずである。

筆者の授業では、単純に3倍の学習効果を狙っていると説明している。モノの見方考え方には、三種類あると考える。一般的な見方、その反対の見方、そして自分の見方（見解）である。一番目と二番目は、授業の資料や、市販のテキストなどで事前予習が可能であると言える。授業では、

「市販のテキスト類」に書かれていないような部分を主に取り上げるようにしている。そして三番目は学習することはできない部分、自ら実践するしかない部分であるといえる。これらの全てをできれば講義は目指すことが理想であると筆者は考えているわけである。

そもそも録音ファイルの活用をまず思い浮かせてくれたのは、ある学生からの申し出だった。一度ならずまた、複数の受講学生からの要請により、授業ログの公開方法を考えたという事情もある。また、録音させて欲しいという希望との関連の背景には、学生からノート作成へのアドバイス要請があったという事情もあった。「どのようにノートを取ればいいのですか」という質問形式のモノもあれば、「ノートが取れない」という不満やクレームともいえる意見として、上がってきた場合もあった。筆者の講義では基本的に定番的なあるいは儀式化したような板書を、発表者は行わない。また既存あるいは事前準備の整った資料を棒読みや資料を参照しながらの一方的な説明的授業は、筆者はできるだけ避けるようにしている。むしろ自らの頭で、こちらから与えた情報の類を、租借して理解する、つまり「考える」ことを促すような授業を心がけている。

それよりも集中して聞くこと、そして同時に考えることを当初から促してきた。

しかしノート取りによる安心感のようなものも学生には確かに必要である。ある種の学生にとっての保険のようなものと言えいいだろう。キーワードを板書するメモ書きのように見える板書を後から講義ノートと資料としてまとめる方法について、むしろ熱心に聞き、授業参加、集中度の高い学生からの相談が多かった。こういった事情が、ここでの仕組みとやり方を色々試行錯誤を始めたきっかけであり、その後の改定への動機となった。

### Ⅲ. 授業ログ活用のための具体的な方法

- ・インターネット上に、教員からの情報発信拠点としてブログを開設（無料サービスを利用）
- ・毎回ICレコーダーを装備して自らの講義を録音。基本的にMP3形式で保存。
- ・インターネット上のファイル保管サービスにアカウントを開く（無料サービスを活用可能）
- ・講義音声ファイルを、その開設したインターネット上のアカウントにアップロードする。  
（一般公開するわけではない。）
- ・一方、授業終了後に、板書を写真撮影する（必要に応じて枚数など適宜）。JPG画像から必要該当箇所を切り取り、パワーポイント(PPT)に貼り付けてスライドに仕上げる。そしてパワーポイント・ファイルに保存する。(スライドは概ね1枚～3枚・板書の量による) そのファイルも板書ログ・ファイルとして保管共有アカウントにアップロードする。
- ・保管共有サービスは、保管場所を示すURLを毎回表示発行するので、それをコピーして、先に開設したブログ上の記事に、リンク先として貼り付ける。ブログの読者(受講学生)は毎回の授業の音声ファイルと板書ファイルをリンク先から自由にダウンロードして印刷したり視聴することができる。

これらが一連の流れである。従来から出席票を作成して配布し、その白紙裏面に自由に質疑やコメント記入を学生に促していたが、それと並行して先のブログへのコメントを書き込むことも認めている。先の授業の内容を音声記録と画像記録をし、早送り再生で参照することにより、学生自身による資料ノートの作成を促している。これらの資料は、板書ファイルについてはそのまま試験の持込可としている。この仕組みの一番の利点は、個人レベルで、授業の復習及び予習のための支援ができるということであり、ノート作成という作業を通じて学生に授業の理解を深めさせる効果がある。ちなみに実際に筆者が説明する際には、「一回の授業でキーワードとしてピックアップできる事柄を最低一つは必ず見つける」よう学生には指導をしている。

ここで示したのは、筆者が、できるだけ安価でこういったノート作成力の向上を図るためにネット上のサービスを活用できないかとサーベイしたところで、当時開始されはじめてきた、ネット上の保管スペース提供サービスのいくつかを試行し、また組み合わせてみることにより実際に使っているモノを示した。よってこれが最良、唯一なものではない。ただ使用に当たり留意しておくべきことは、有料か無料かに関わらず、使い勝手の良いものをいろいろ組み合わせて最終的には使用することであろう。とういのは、有料と無料の違いにおいては、たとえばアクセス回数とか、保存容量などで制限を無料バージョンの場合には設けておいて、より大きな保存スペースの確保などのためには、有料のオプションサービスを提供するといった、無料を有料サービスへの誘導手段として設定しているといったものが多いからである。そういった目にみてもわかりやすい条件などの拡大を、費用負担を伴う場合には多く設定されているが、使い勝手のよさ、一例としていけば、ネット上のファイル転送速度などについては、保証あるいは差別化がされているかといえさほど利便性が、有料になったからといって向上しているとは言い切れないと感じるということである。よって、比較的容量や処理能力が小さいと思われるようなサービスでも、たとえば保存する音声ファイルのフォーマットを、圧縮度がより高い、MP3で行えば、AVI形式のファイルよりも相当小さくすることが可能であるといった類の事実である。圧縮効率が高いことにより、基本的に臨場感あるいは多重音声などにおいて、ファイル保存形式によって質が低下するといった事実もあるかもしれないが、実用上、聴き取りに関して明晰さが保たれているのであれば、なんら低位フォーマットで十分であるということである。そういった対応を探ることにより、十分既存の、無料サービスの類の組み合わせにより、ここで説明する仕組みは十分機能させることが可能だということである。

ここで一点補足しておくことがある。授業記録（ログ）の活用という目的であるのならビデオ録画でも可能かということである。しかしここで取り上げた方法を推奨するし、むしろビデオは避けた方が良い。なぜビデオでないのかというと、筆者も、実はビデオなども試して見たが、時間節約にはなるが、電子データとして見たときに、画像ファイル自体が、画質や鮮明さなど「再現性」を求めれば求めるほど肥大化して、特に動画フォーマットによれば、15分程度の講義の一

部でも、数ギガバイトの大きさになる。また、動画ファイルの場合、様々なフォーマット（録画形式）がソフト的にも開発されて、画像の鮮明さを保持しながら、記録媒体（ハードディスク等）の占有率を高めない形式もある。例としていえば圧縮作業をソフト的に組み込むといった改良を施すなどして、その限りにおいては以前よりも相当技術的に進歩して使いやすくなっている。しかしながら、CPUに代表されるハード的な改良及び処理能力の格段の進歩及び、記録媒体の取り扱い可能量の拡大と低廉化によって、保管容量の肥大化問題はより低価格の大容量記憶媒体の普及と活用によってだいぶ負担軽減されてきたといえる。また、CPUなどのハード的、ソフト的能力向上と活用により、こちらもだいぶ負担軽減されてきたということが全体的にいえるだろう。しかし、ハード、ソフト共に最新鋭のしかも最も効率の良いものをユーザーが常に使えるわけではないということである。全てのハードやソフトの入替などによる、対応が全てのユーザーにできるわけではないという事情がある。全部でなくても、一部のみハードあるいはソフトのバージョンアップなどによる対応ができたとしても、性能限界が違うハードを混在して使うような場合、処理能力の高いものに、合わせてハードやソフトを運用することはできない。処理能力がハード、ソフト的に従来そのままのものが一部でも混じった状態で、全体を一丸として運用する場合を想像してみれば分かる様に、動画の使用環境については、処理能力が従来そのままでは、動画の再生、編集、録画などの関連作業全てにおいて、機械が動いてくれなかったり、不十分な作業しかできないといったことが当然起きてきてしまう。分かりやすく言えば、録音音声や動画再生において、音飛び、画像飛び、コマ落ち等々の、動画ファイルの使用に関して重要なアクションが機能しないというような場合が起こるといえる心配がある。従って、理想型として、例えば多重音声の録音ファイルを扱ったり、「きれいな音声」が扱えるとか、大画面の鮮明な動画ファイルが軽快に動くといったようなことを目指しても、編集や加工を通じて提供される無駄のないコンテンツだったとしても、それを使用（とくに再生作業など）する側のハードが、従来型のものであるといった場合、せつかくのコンテンツも、活用できないような状態も十分起こりうるという事実である。そういった場合は、復習も、ノート作成にも、せつかくの音声、録画画像ファイルの類はほとんど役に立たない。そういったことから、あえて言えば、「扱いやすさ」の最低基準を模索しながら実際には、ファイル作成（画像及び音声）を行うように心がけた。その結果として、一石二鳥ともいえるかもしれない、板書ファイル（画像のプレゼンソフトへの切り抜きと張り込み）、音声ファイル（MP3形式）の活用という形が最もわかりやすく扱いやすいファイルであるということになったということである。

勿論、最新鋭あるいは高機能機を使用しているユーザーには、殆ど影響は受けないということである。広く利用促進と導入を促すためにも、画像の鮮明さや音声のクリアさなどは高度なものを求める必要は無いといえ、むしろ汎用パソコン程度でも十分取り回しの聞く程度の画像、音声ファイルとすべきだということである。従って、授業ログ（記録ファイル）のファイルは、動画

ファイル(ビデオ)である必要はないということになったわけである。音声ファイルに関しては、動画ファイルよりも、容量の大小において、MP3形式のものが普及しているといえ、この形式のファイルは、通常のモノラルレベルの音声ファイルであれば、従来型の通常汎用機でも十分再生可能である。録画時に形式や精度を中程度のままで使用しても十分実用には耐えるということでもある。結果的に、ビデオ録画ファイルの場合、その記録ファイルの活用を考えたときに、記録という目的だけからみれば十分対応可能だろうし、復習目的の繰り返し利用を考えた再現性という観点からすれば非常に有効であろうが、ノート作成訓練という目的からすると利便性はむしろマイナスになるということである。

#### IV. 教育実践による改善効果とその確認

さて、実際にこのやり方を基本にして、実際の筆者の講義において実践してみた結果から述べていくことにする。まず第一に受講学生からは、記録のためのメモや、ノート取りの負担から解放されるので概ね好評である。ノート準備からしばし離れられるというゆとりは、本来なら授業内容をより集中して聴講することに繋がることが期待された。ただ現実には、ノート取り自体が受講学生の手間を省くわけでは無いわけで、熱心な受講生がノート取りを止めたかといえればむしろ逆で、講義のその場でのメモ取り、ノート取りは、後からの見直しや、後で公開される板書写真ファイルとの付け合わせのために継続されていたのが実態である。後から、内容を取捨選択したりして、自分用の独自ノートの作成の手間が現実にはより有効な学習手段であるというこちらの目論見もあるのだが、中々そこまで実践できる学生は少ないのが現実だったといえよう。

それはともかく、こちらの目論見としては、まず講義に集中することができ、教員からの双方向的な問いかけなどに対する応答の必要性から緊張感の持続が保たれるものと期待したが、ノート取りからしばし軽減される反面、非常に「疲れる」との意見も当然出てきた。これは講義する側もある意味同様に、長時間の講義内の集中は、場合によっては非常にきついこともあることは否めないということである。

更に、質問や意見などブログへの書き込み、出欠票裏側への自由記入により意見交換がタイムリーにできるようになったことも成果に挙げられる。質疑応答を自由質問の形で学生達に積極的に発信するように促したが、こちらが講義した内容をどのように理解したかを、個別のノートをチェックまでする必要はないと考えたので行わなかった。それは個別の学生によって「ノート」(資料)として必要なものは当然異なると考えたからである。良いノート、悪いノートという基準は率直に言って、意味が無い。あるとすれば、ノート取りをした本人にとって役に立つ程度に応じて、良い悪いの判断はできると考える必要があるからである。

質問なども、「これは～ということですか」の類の確認型の質問の類は、こちらの意図が伝わったかどうかのチェックの一助になる言い方だと考える。学生達にもそういった形式での質問を推

奨した。出欠票裏面への記入に対するフォローは、別の機会に細かく説明をすることで対応すればよい。授業配付資料なども配布可能なものは、当該ファイル保管共有サービスを通じて配布可能になる。それはら不要になれば削除可能である。予習のための課題や、参考資料（書籍、論文、新聞、雑誌など）を柔軟かつ機動的に提示できる。予習や復習の方向性がわかりやすい。講義をする側からのコメントやアドバイスも随時書き込めるのでアナウンス効果は大きい。

何より、授業欠席者も資料としての授業記録を参照できることは便利であろう。自習ノートの作成は、試験対策が主とはいえ自ら作成する作業は、復習効果は非常に大きく、講義内容のまとめ、理解に大いに役立っている。質問内容やコメントは、必要であれば公開し、講義の中でアドホックに随時答えている。

いずれにせよ学習意欲の高い学生に対する学習効果は明らかに大きい。講義側も、非常にホットな事件や事例を機動的に取り上げることができる。これは、授業内容のマンネリ化を回避するのに一つの有効な手段でもある。例えば、直近に発生した興味深い関連事例などを、授業で解説しながら、追加分析及び自力分析を促すと、特に積極的かつ学習意欲の高い学生のやる気を非常に高める。

ただ学ぶ側だけでなく、教える側にも同様の意欲と研鑽が求められる。高度の緊張感と新鮮さを備えた授業設計が可能であるが、負担もそれなりに大きい。ただその分充実感も大きい。もちろん試験問題の作成も創意工夫が必要になる。採点評価作業も簡単には済ませられない。レポートの代替的な要素がある試験となるため、学生の思考プロセスの進化の程度を、じっくり答案を読み込むことで把握する必要があるからである。記憶の善し悪しを量る試験ではないので問題作成には気を遣う。また、授業アンケートなどを本学でも惰性的にとっている状態だが、試験の際に筆者が独自に行う授業に関する質問（成績には当然関係ないと注釈をつけて試験問題の最後に付加）では高評価を得ている。大学の通り一遍のアンケート類でも悪い評価は出ていない。この方式の達成度や満足度は、学生自身の意欲に相当程度比例していることを思えばそのアンケートでの評価はあまり参考にならないと考えている。学生からの普段からの自由なコメントや要望の中に真意がある。筆者の授業に対しては、高評価を伴った生産的なものが多いことを報告しておく。何より繰り返しになるが、「他の授業でもして欲しい」という意見は多い。

## V. まとめと今後の展開

既存の無料のネット上の仕組みを組み合わせることで活用することにより、受講生に対してノート作成を促すことによって学習効果を高めることができると考え実践した。また受講票（出欠票）の紙の小片の裏を活用するだけで、学生教員間の双方向の機動的な情報交換、フォローができることも実証した。既存の手法や道具を使うだけでも、相当の授業改善および、講義内容の理解の増進、そして復習、予習といった受講に際して必要な関連学習を促すこともできることを示したと

いえる。もちろん、いずれも仕組みや方法もそうだが、受講生自身の、いわゆる熱意や関心の高さに、どんな良い方法でも成否は依存することには変わりはない。実際に、いろいろな意味でやる気のない学生と言われる学生層には、機能するとは必ずしも言えない。最初の開始時点でのものめずらしさや、好奇心にアピールしたところでの彼らのインセンティブ喚起効果は認められるが、講義は基本的に一度ではなく数回続くために、持続した集中力や関心を保つことはできないだろうということである。これは当初から予想したことなので、特段驚くことではない。むしろ、学習態度、受講態度の良い学生、熱心な学生にこそよりアピールした方法として機能したといえる部分があることを報告しておきたい。当初の関心ややる気を取りあえず起こさせるという意味においては、学習するという姿勢に乏しい学生には多少の効果はあるが、全ての学生にプラスになるかどうかといえば、当然ながら受講生の意識に大きく依存することを理解しておく必要がある。特に、予習、復習といった部分にかかる、自習部分（授業外でのリサーチなどの部分）に関してのインセンティブがある意味負担とを感じるものは多いようで、授業の中で「考える」ことよりも、「聞いている」だけの授業という受講形態に慣れてしまっているが故に、面倒くさくなって、重要な訓練の様子を含んだ部分はなかなか定着しないと言える。簡単に言えば、できるだけ簡単に話を聞いて、理解したような気分になれる授業が好まれる傾向があるといった事情が背景にあるといえるだろう。講義をする側にも、不満や怠惰な受講態度、学習態度に対しての相当程度のまた気の長い忍耐で対応するしかないともいえるこのあたりの事情は、なかなか忸怩たるものがあるということである。

ここで紹介をした手法により、授業のライブ感（臨場感、現場感）ゆえの機能性や有効性を最大限発揮するように授業設計ができる。そのために動画ファイルのアップという要請も一方にあるが、本論の3節でも述べたように、数々の技術的な制約と、使い勝手の悪さに加えて、もっとも重要な本手法により狙うべき目的達成のための方向性とはやはり合致しないので、今後も考えるつもりはない。

また、昨今の著作権法の改定などとの絡みで、より微妙な問題として考えておく必要があるのが、著作権等の諸権利との関係の他に、部分公開ながら、改ざん、濫用を含めた悪用の可能性が常にあるということである（無断でYOUTUBEなどに載せたり、ネット公開したりという事例）。情報発信者としての権利云々というよりも、一度外部に発信したものを勝手に使われるということだけではなく、一部改ざんしたり、悪用されたりする可能性は、受講生自体の良識を信じながら、その利便性追求のためにやっている趣旨を強調しながら繰り返し説き続けるしかないところがある意味難しいところである。何か問題が起きた場合こういったサービスは提供できなくなるということを厳しく、筆者は講義においてことある毎に注意を促しているが、他に何かより効果的な予防策などがあるかないかは常時検討中である。そのあたりの提案なども含めて今後、手法自体の改善や改定を考えていきたい。

《参考文献. URL》

【1】「特集1 オンラインストレージ大全ー無料のサービスを賢く使い分ける」 (日経パソコン, 2012/01/23号)

【2】小笠原宏(2011)「ビデオ録画によるデータ・ベースの構築及びその教育コンテンツとしての利用を考えたより効果的な授業公開相互参観制度(OCW)の提案」流通科学大学高等教育センター紀要第8号 p. 1-13

(参考URL)

・MEDIA FIRE STORAGE SERVICE <http://www.mediafire.com/>

引用文献、注

<sup>1)</sup>本論文は、平成25年度ICT利用による教育改善研究発表会((社)私立大学情報教育協会主催/平成25年8月10日 於:東京理科大学 森戸記念館)で行った研究発表「板書画像と録音ファイルの活用による授業振り返りとノート作成力の向上」の抄録を元に、加筆、修正、補足を行ったものである。当日使用したプレゼン資料及び発表の様子は動画でネットを通じて有料配信されている。

<sup>2)</sup>入学後の1年次の基礎教育(本学では基礎ゼミという少人数14-5名の授業)でも、「授業の受け方」のようなガイダンス、講義が行われている。その中にノートの取り方も含まれるものであり、他にプレゼン資料の作成の仕方(レジュメの切り方)なども筆者は授業で取り入れている。